

金継ぎ

ライター：佐藤萌、神保嘉寛 エディター：横澤樹

1500年代から伝わる日本の伝統的な陶磁器の修繕技法「金継ぎ」が、現代において静かなブームとなっている。金継ぎとは、割れた破片の接着や欠けた部分の埋め合わせに漆を用いて繋ぎとめ、その上に金粉を蒔いて装飾を施す技法だ。使われる漆は身体に害がないため、金継ぎ後の食器を安全に使用できるという機能性も兼ねている。

歴史的には、金継ぎをする人の肩書きは修理工ではなく芸術家だ。金継ぎされたものは単なる修理品に留まらない芸術作品であり、美術展に出展されることもある。

「金継ぎの敷居を下げて広げていく人が一人くらいいてもいいんじゃないか。生活に根ざした金継ぎがあってもいいのでは」

金継ぎ教室「金継ぎ部」の主催者で、漫画家兼漆作家の堀道広さん（40）は、純粹に道具を修繕したいと思う心を大事にする。震災後には、金継ぎの需要が増えた。金継ぎを教えるだけではなく注文も受けている堀さんは、かつて形見のぐい呑からトーテムポールのような置物まで金継ぎを施したという。

短期大学の漆科を卒業した堀さんには、芸術家として活動する道もあった。しかし自分の名前を売って作品を作ることよりも、職人として影で人の手伝いをするのを好んだ。彼は漆を好きになってもらいたいという気持ちでこの活動を続けている。

「器が百、全部だから、金継ぎが目立ってはいけないし、器に合った金継ぎがある。金継ぎはゼロに戻す作業。」と堀さんは金継ぎのポリシーを語った。もはや金を使うことにこだわる必要もなく、器そのものの良さを引き立てるための裏方だという。「ぬか床をかき混ぜると変わらない。」

7年前にスタートした金継ぎ部の活動場所は徐々に増え、現在は東京、神奈川のカフェ5箇所で開催されている。ある平日午後7時、2週間に1度金継ぎ部が開催される西麻布のカフェでは6人の生徒が思い思いの食器を前に格闘していた。およそ20破片にも割れたお猪口、縁が欠けた大きな茶碗、角が折れた四角い器、廃盤になってしまったという割れた洋食器の平皿、取手の取れた急須。中国から来たという骨董好きの女性は、煌びやかな模様が入った器と小さな急須を直していた。素朴な器のテーブルには新聞紙が敷き詰められて手元ランプが赤く灯り、漆の匂いがツンと漂っていた。

堀さんは人生と金継ぎを重ね合わせる。

「人生何度でもやり直せるぞ、壊れてもやり直せるぞ。」

編集後記

伝統技法を現代にあったやり方に還元して広めていく。私はそのような活動をしている人々に強く惹かれるし、応援している。一方で、伝統をかたく保持する存在を尊敬している。両者が対立してしまうことはしばしばあり、それは互いにプライドを持って活動しているが故に仕方がないことだと思う。しかし文化や技術を守っていくためには、両方の存在が必要だ。だからこそ、文化の中に入り込む側、技術を教わる、楽しむ側の人たちが、両者への理解、尊重を忘れてはいけないのだと思う。（佐藤萌）

金継ぎという名前を知らない人は多くいると思う。私も、今回記事を作ることで金継ぎが何か知ることが出来た。そして、今回伝統技術を行っている職人にも取材することができたが、職人は強い信念を持っていることが分かった。伝統技術での金継ぎと現代に合った金継ぎ、そのどちらも尊重することを忘れてはいけないと思う。（神保嘉寛）